

基本通りの中干しは必要？不必要？

最高分けつ期の稻を比較

しかし、5月末のガス抜きでしつかりと根を伸ばして稻が入水と同時に大変身をしてくれました。一気に分けつ数を増やし、しかも太く扇型に開いた期待通りの稻姿になっています。残念ながら、ガス抜き後に充分に水を張れなかつた田は茎がやや細く、茎数も少ない状態です。水の力を改めて実感します。

6月の末から7月のはじめの最高分げつ期を迎えた稻は最も勢いを増し、濃緑色の元気な姿を見せてくれています。春先からの苦労が一気に報われたような気がしてホッとしています。隣の水田と分げつの多さを競うのはまったく無意味なことだと充分に判つてはいるのですが田植えが遅くなると本数も少ないと、これまでの期間の稻姿がなんとも寂しげに見えてしまふのは私自身が人間として未熟であり、弱いからなのでしょうか。

生産者通信

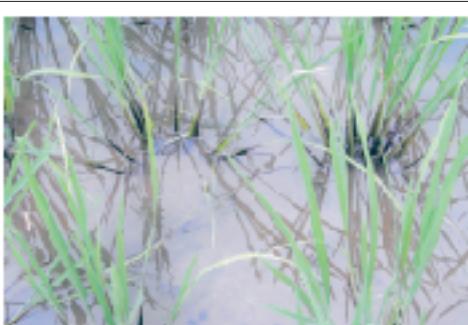
NPO法人
ミニーションセンター
定価 100円(送料込)



写真
A



写真
B



写真C

コシヒカリです。所の方のもので、田植えが45日早く坪60株中干しに入っています。茎数は数えていませんが40本位にはなつていて株の中はムレムレ状態です。中干しをやつても分げつは止まらず、やがて弱小分げつは枯死して20本前後に落ち着くでしょう。しかし、残つた茎は細く、太陽の光を求めて伸び上がり、第4・第5節間が長くなつて倒伏しやすくなり、充分な穗肥をやることができなくして小さな穂しかつけることができないでしよう。それでも天候さえ良ければ登熟歩合が上がつて50kgは採れるでしよう。

Aは落水途中の我が家の一発施肥の慣行コシヒカリです。坪47株ですが1株20本を越えはじめています。植え付け本数が2本前後、浮き苗にならない程度浅植えをしています。その効果だとわれますがすでにしっかりと開帳し、力強く根を張っています。溝切りをおくした後は出来るだけ遅くまで飽和状態を続けるだけです。

心配なのは水です。今年は何処の水源ダムもほどんど空っぽで、的確な水管理をやりたくともできず、工度良く雨が降つてくれるのを待つ他なさそうです。

写真Cは、落水途中のA S有機の稻です。1株1

う2本植えで抑草のため深水(8~10cm)にしてきましたが、ようやく10本並後になりました。落水後は24~25本まで分げつすることを期待しています。*****
昨年のトンボの羽化は6月13日から始まりましたが、今年は遅れて17日から始まり、羽化数は昨年の30%位と少なめでした。羽化が遅れた原因も羽化数が少なかつた原因も判りません。問題は昨年まではまったくといつてもよいほど草がでなかつた(10a当たり10本位のコナギとタルイ)No.2の水田にもこんなぎがポツポツと発生したことです。No.2水田には発生しませんでしたが、No.1とNo.3の

水田は田植え4～5日後にヒ工がびつしり生えましたが、米ぬかペレットの散布と深水でほぼ消滅していました。

しかし、部分的にはうもののコナギの方がかなりびつしりの状態になつてしまつた所ができてしましました。1～2葉期の早い時期に除草機あらいはチエーンを引いてやれば有効な対応ができると思いましたが、その時には都合で作業ができなかつたことと、落水後に手取りするつもりで放置したため、落水後には水面まで葉を伸ばしてしまいました。2連の除草機を押してコナギを浮かせてみましたが、労力の割には効果的とは言えない結果でした。

やはり除草の極意は「草を見ずして草をとる」以外になさそうです。コナギが発芽したばかりで根を伸ばさない内に鎖を引いてやれば稻には負担をかけず、楽に効果的な除草が可能でしよう。今年は冬仕事に鎖すだれの除草器具を自作しようと思つてゐるところです。

内山常蔵記

2009年6月22日 商経アドバイスより

21年度 新規需要米の見通し

目標にはほど遠い作付け

飼料用・
1万数千ヘクタール規模か

「水田フル活用」を掲げて各種助成措置も講じて取り組まれている21年産新規需要米(米粉・飼料用米)だが、作付面積は20年産の実績に対して1~2割程度の1万数千ヘクタールにとどまる見通しが強まっている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

補正予算の成立時期までに生産現場では21年産米の作付けが進行していることから、実際には主食用米の過剰作付面積の中から新規需要米への振り替えが進められている形になる。20年産の過剰作付面積は5万4000ヘクタールであり、この中から新規需要米に差し替えていくイメージになる。

すでに若干の新規取組分も含め20000ヘクタール程度が新規需要米に振り返されている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛かっている。

農水省では、20年産における新規需要米の作付実績(昨年7月中旬で1万1558ヘクタール)が維持されたいことを前提に21年度本予算・補正予算に盛り込んで助成処置によって、地域協議会を通じて取組面積の上乗せへ向けた推進活動の詰めの段階に差し掛けている。

秋田の酒造30社、酒米を地元農協から調達

コスト1割削減

秋田県酒造組合(伊藤辰郎会長)に加盟する酒造会社30社は、日本酒の原料米の調達方法を見直す。従来は全量を全国農業協同組合連合会(全農)など集荷業者から仕入れていたが、一部を地元の農協から直接調達する。3月に実施された加工用米の制度改正を利用して全国初の試みで、コストは1割程度削減できる。

酒造各社は生き残りをかけてコスト削減や消費喚起に知恵を絞っている。日本酒の消費不振は深刻とみている。日本酒の需要米の生産計画が実現すればならない。このため卸業者への結び付けが実現する。このため卸業者には「過剰作付面積」が減る。このため卸業者には「過剰作付面積」が減る。

秋田県酒造組合(伊藤辰郎会長)に加盟する酒造会社30社は、日本酒の原料米の調達方法を見直す。従来は全量を全国農業協同組合連合会(全農)など集荷業者から仕入れていたが、一部を地元の農協から直接調達する。3月に実施された加工用米の制度改正を利用して全国初の試みで、コストは1割程度削減できる。

酒造各社は生き残りをかけてコスト削減や消費喚起に知恵を絞っている。日本酒の需要米の生産計画が実現すればならない。このため卸業者への結び付けが実現する。このため卸業者には「過剰作付面積」が減る。このため卸業者には「過剰作付面積」が減る。

売れる米づくり技術情報(新潟なんかん米改良協会)より

出穂期は平年並み! 早生の穗肥は遅れずに!

品種	場所	移植	草丈(cm)			茎数(本/m)			葉数(葉)			草丈(cm)		
			本年値	前年値	目標値	本年値	前年値	目標値	本年値	前年値	目標値	本年値	前年値	目標値
コシヒカリ	平坦地	5/11	42.5	35.1	46.0	495	429	490	8.7	8.0	9.4	41.7	37.5	39.0
	中山間	5/11	43.8	39.0		427	379		9.1	8.0	9.4	42.2	38.7	
	平地	5/6	44.5	39.0		45.0	490		8.8	8.8	9.9	40.5	44.8	40.0

2 穗肥の施用前には、必ず幼穂を確認しましょう

幼穂長による出穂前日数のめやす

幼穂長(cm)	0.02	0.1	0.02	0.13	0.5~1.0	4.0~6.0
出穂前日数(日)	30	24	23	20	18	12

3 カメムシ対策(草刈)を徹底しましょう

発生時期: 平年並~やや早、発生量: やや多

※ 各地域の病害虫調査でも畦畔・農道等の雑草が繁茂し大きいところでは、カメムシが確認されています。
※ 雑草が結実しない間隔で草刈りを徹底しましょう。

※圃場内の平均的な株から最も長い茎を抜き取り計測。数株から採取し総合的に判断する